

大谷大学公開講演会

「出会いが開く世界」(2022,7,8)

大谷大学 一楽 真

はじめに

1 仏教の課題

- ・迷いの現実を痛む心から出発
「世人、薄俗にして共に不急の事を諍(アツ)う」
「世間の事、かわるがわる相(アイ)患害す」
「死生の趣、善悪の道、自ら見ること能わず、語る者あることなし」(『大無量寿経』)
→これをどう超えるかが仏教の課題

2 親鸞における学び

- ・比叡山での学び…断惑証理(惑いを断って真理をさとる)の修行
真面目さを誇るという問題が出てくる。人間の心が陥る「執われ」という落とし穴。
→修行の度合いによって、優劣を競い、人を序列化することが起こる。
- ・比叡山の現実
最澄(伝教大師)以来、誰もが平等に成仏する「一乗」という理想を掲げていた。
しかし、現実には出家・在家、男・女、善人・悪人という簡(エツ)びがあった。
→真実に迷いを出離することができる道を求めて下山した親鸞。

3 法然上人との出遇い

- ・「ただ念仏」の教え
「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」(『歎異抄』)
→阿弥陀仏によって成り立つ仏道との出遇い
- ・親鸞における仏教観の転換
〈積尊について〉
宗教的偉人としての積尊 → 阿弥陀仏の本願を説く積尊
〈迷いを離れる方法について〉
自らの修行を積み重ねること → 阿弥陀仏の本願に導かれること
〈迷いを離れることができる者について〉
修行を完成した者だけ → どんな状況にある者も簡ばない
→この根には人間観の転換がある

4 真実教の顕揚

- ・「それ真実の教を顕さば、則ち『大無量寿経』これなり。
この経の大意は、弥陀、誓いを超発して、広く法蔵を開きて、凡小を哀れみて、選んで功德の宝を施することを致す。釈迦、世に出興して、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに真実の利を以てせんと欲してなり。是を以て、如来の本願を説きて経の宗致とす。即ち、仏の名号を以て経の体とするなり。」（「教巻」）

5 如来の出世本懐（出世大事、出世正意）

- ・「何を以てか、出世の大事なりと知ることを得るとならば、『大無量寿経』に言わく、今日世尊、諸根悦予し、姿色清浄にして、光顔魏々とましますこと、明らかなる鏡、浄き影表裏に暢るが如し。威容顕曜にして、超絶したまえること無量なり。未だかつて瞻覩せず。殊妙なること今の如くましますをば。大聖、我が心に念言すらく「今日、世尊、奇特の法に住したまえり。今日、世雄、仏の所住に住したまえり。今日、世眼、導師の行に住したまえり。今日、世英、最勝の道に住したまえり。今日、天尊、如来の徳を行じたまえり。去来現の仏、仏と仏とあい念じたまえり。今の仏も諸仏を念じたまうこと、なきことを得んや。何が故ぞ威神の光、光いまし爾」と。（中略）仏の言わく「善い哉、阿難、問えるところ甚だ快し。深き智慧、真妙の弁才を發して、衆生を愍念せんとして、この慧義を問えり。如来、無蓋の大悲を以て三界を矜哀したまう。世に出興する所以は、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに真実の利を以てせんと欲してなり。」（「教巻」所引『大無量寿経』）
- ・「しかれば『大経』には「如来所以興出於世 欲拯群萌恵以真実之利」とのべたまえり。この文のこころは、「如来」ともうすは、諸仏をもうすなり。「所以」は、ゆえ、ということばなり。「興出於世」というは、仏の世にいでたまうともうすなり。「欲」はおぼしめすともうすなり。「拯」はすくうという。「群萌」はよろずの衆生という。「恵」はめぐむともうす。「真実之利」ともうすは、弥陀の誓願をもうすなり。しかれば、諸仏の世々にいでたまうゆえは、弥陀の願力をときて、よろずの衆生をめぐみすくわんとおぼしめすを本懐とせんとしたまうがゆえに、真実之利とはもうすなり。」（『一念多念文意』）

6 仏弟子の使命

- ・「ここに愚禿釈の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈、遇いがたくして今遇うことを得たり。聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。真宗の教行証を敬信して、特に如来の恩徳の深きことを知りぬ。ここをもって、聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなりと。」（『教行信証』序）

まとめ